

潤いに満ちたキャンパスにて

田 淵 結

「眉にかざす清き甲（山）、萌えたつ緑、Mastery for Service」

（関西学院校歌『空の翼』 第二節）

旧約の冒頭、創世記のなかで主なる神が最初に作ったエデンの園、そこに最初に人間が住むことになった場所もまた、自然のみずみずしさに満ち溢れた場所であったようです。そこにすむアダムとエバとは、その自然の豊かさのなかで安定した日々をすごしました。しかしやがてその自然の豊かさを失わざるを得なくなった人間に対して、自然は「土は茨とあざみを生えいでさせる」と、その厳しさをもって向き合うことになります。私たちがいつしか、自然のなかに生かされている存在であり、そのなかで守り育まれるべきものとしての立場を忘れつつあるなかで、私たちはまさにエデンの園を追われたアダムとエバのように、自然に敵対するものとして自然の厳しさにさらされつつあるようです。

4月から新しく聖和キャンパスに設けられた教育学部に移ったある日、一号館4階に与えられた個人研究室から見渡すと、上ヶ原キャンパスからとはまた違った光景に目を奪われる思いでした。そのなかで圧巻なのは甲山の存在感です。さらに聖和キャンパスが「聖和の森」と関西学院キャンパスを取り囲む環境の美しさ、キャンパスの潤いを強く感じさせられます。

1889年に開設された関西学院は今年創立120周年を迎えますが、最初のキャンパスとなった現在の神戸市灘区王子公園付近はかつて「原田の森」と呼ばれるほどの原野の一角だったといわれており、そのなかで子どもが道に迷ってしまったという事件さえあったようです。そして創立40周年の1929年、大学昇格を目指して学院は西宮上ヶ原に移転しますが、その理由は校地の手狭さだけではなく、神戸市の発展のなかで学院を取り巻く自然環境が悪化したこともあり

ました。そして上ヶ原に移って造られた最初の校歌が「空の翼」ですが、その歌詞は上ヶ原キャンパスの風景をみごとに描き出しています。その後上ヶ原キャンパスでは戦後までにもう二つの校歌が造られました。そのひとつが「みどり濃き甲山」、まさにその曲名そのものが自然に包まれたキャンパスを歌い上げていますが、もう一曲が“A Song for Kwansei”英国の詩人ブランデンの詩に山田耕筰が作曲しましたが、この校歌もまたブランデンが実際に学院のキャンパスですごした印象のなかで生まれたもので、“Beneath your trees, beneath your towers”と木々の豊かさが改めて歌われます。

日本に数多くある大学のなかで、関西学院大学ほど豊かな環境に囲まれた大学は数少ないでしょう。そのキャンパスに学ぶこと、そしてそこでキャンパスライフを過ごす毎日の中で、私たちは主なる神が創造されたと聖書が語る、ゆたかで見ずみずしい自然環境によって育まれるのです。そこで私たちが感じる風がまた、主なる神の息吹として私たちを生かし、私たちにあらたな生き方とビジョンを開くものとなるのです。

(大学宗教主事、教育学部教授・宗教主事)

関西学院の教養

宮 田 満 雄

聖和キャンパスでの初めての本学院春季宗教運動大学合同チャペル講師にお招きを受け深い感慨を味わっています。それは聖和大学の前身の大きな流れはランバス女学院で、関西学院と共にランバス先生ご一家がその創立にかかわっておられたからであり、私自身が以前三年間聖和大学の学長を務めたことがあるからです。両大学の100年を越える歴史を考えるとその背後に人知の測り知